2015 年 10 月 4 日「神の子としての権威」

＜　聖書箇所　＞「ヨハネによる福音書 10 章 31 節～39 節」

　そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取りあげた。するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。ユダヤ人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」。イエスは彼らに答えられた、「あなたがたの律法に、『わたしは言う、あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。神の言を託された人々が、神々といわれておるとすれば、（そして聖書の言は、すたることがあり得ない）父が聖別して、世につかわされた者が、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『あなたは神を汚す者だ』と言うのか。もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、もし行っているなら、たといわたしを信じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。そこで、彼らはまたイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手をのがれて、去って行かれた。

＜　説教抜粋　＞「神の子としての権威」

　今日の説教の題名は、「神の子としての権威」です。聖書の拝読箇所は、ヨハネによる福音書 10 章 31 節～39 節です。「そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取りあげた。するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」」。

　この箇所には、ユダヤ人たちが、イエス様を殺そうとしている場面が書かれています。それに対してイエス様は、その理由を尋ねました。それに対するユダヤ人たちの回答は「神を汚したからである。」ということでした。人間であるのに、自分を神としている点が、神を汚しているというのです。

　しかし、律法では、「神の言を託された人々」を「神々」と称しています。この場合は、あくまでも一般名詞であり、唯一の神自身を指す固有名詞ではありません。神から使わされた人を「神」と称したとしても、これが即ち、多神教的な考えとは結びつきません。ですから、イエス様が神の子であるという証言をしたとしても、聖書的には何らの問題もありません。

つまり、ユダヤ人たちによるイエス様への訴えは言いがかりに過ぎないのです。イエス様が十字架にかけられた理由は、ユダヤ教の律法学者たちが抱いた愛の減少感ゆえでした。このような、相手の価値を下げることで、自分の価値を相対的に上げようとする傾向は、もしかしたら私たちにもあるかもしれません。しかし、これは、決して本来的ではありません。